

日本書紀五十猛神の条

五十猛神の真相に迫る

三井 淳

①

いそたけるのかみ

素戔鳴尊(スサノオノミコト)の御子とされる五十猛神なるは、古事記では全く触れられず、日本書紀で

語られるのみである。この考究を進めるにあたり、まずはその部分の全文を紹介しておこう。テキストは岩波文庫版日本書紀を用いた。

◇ 神代上八段、一書(あるふみ)の第四、第五

一書(第四)に曰はく、素戔鳴尊の所行無状し。故諸の神科するに千座置戸を以てし、遂に逐ふ。是の時に、素戔鳴尊其の子五十猛神を帥めて、新羅国に降到りまして曾戸茂梨の処に居しませ。乃ち興言して曰はく、

「此の地は吾居らまく欲せじ」とのたまひて、遂に埴土を以て舟に作りて、乗りて東に渡りて、出雲国の簸の川上に所在る鳥上の峯に到る。時に彼処に人を吞む大蛇有り。素戔鳴尊乃ち天蠅斬剣を以て、彼の大蛇を斬りたまふ。時に蛇の尾を斬りて刃欠けぬ。即ち撃きて視せば、尾の中に一の神しき剣有り。素戔鳴尊の曰はく、「此は以て吾が私に用ゐるべからず」とのたまひて、乃ち五世の孫天之葺根神を遣して、天に上奉ぐ。此今、所謂草薙剣なり。初

め五十猛神天降ります時に、已にして其の用ゐるべきも多に樹種を持ちて下る。然れども韓地に殖るずして、尽に持ち帰る。遂に筑紫より始めて、凡て大八洲国内に、播殖して青山に成さずといふこと莫し。所以に五十猛命を称けて、有功の神とす。即ち紀伊国に所坐す大神是なり。一書(第五)に曰はく、素戔鳴尊の曰はく、「韓郷の嶋には是金銀有り。若使吾が兒の所御す国に、浮玉有らざば、未だ佳からじ」とのたまひて、乃ち鬚髯を抜きて散つ。即ち杉に成る。又胸の毛を抜き散つ。是櫛に成る。尻の毛は是椀に成る。眉の毛は是椀に成る。みついあつし)

後、素戔鳴尊、熊成峯に居しまして、遂に根国に入りましき。

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おすすぬ新着
◇木曜日は内藤博之さんの「ガウディとピカ

(五十猛歴史研究会会員